
委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第 93 巻の表紙写真を募集（テーマ：農業（水利）施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など：現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など、2024 年 9 月 30 日締切）したところ、32 点の応募がありました。10 月 30 日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し、12 点を選定したので、ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では、学会誌第 94 巻（2026 年発行）も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし、表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は、本誌 66 ページをご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講 評

柳本 尚規（東京造形大学名誉教授）

頭首工やため池、分水工や用水路にまつわるさまざまな写真を見ていると、周囲の人々の息づかいも聞こえてくるような感覚になる。それらは、私たちの生活を支え続けてきた静かなく英雄^なだ。そこには、人々の苦闘、知恵、そして自然と馴染んで調和にいたった長い時間が刻まれている。そういうものの存在にハッとさせられるのが、この表紙写真を選ぶ機会だ。そし

てあらためて人間の知恵と自然の力強さに驚かされる。

知恵と知識の違いも目で分かってくる。自然が人間を動かし人間が自然をつくりだしているともいうような、両者の関係も見えてくるような感覚が湧く。

それは過去と現在が連続しているという実感でもある。写真を見ていると、自然とこちらの身体にも英雄たちの時間が移動し、しみこんでくるような感覚になるのである。そしてもっとさまざまな英雄^なたちの姿を見たくなってくる。朝陽や夕陽、夏や厳冬の中にこそ発見できる姿もあるかもしれない。もっともっと探し出してほしいと思うのである。

第93巻表紙写真入選作品

1号

熊本地震からの創造的復興を目指す
大切畑ダム（ため池）

（農業用ダム保全管理研究会現地調査より）
遺跡発掘の現場を臨んでいるような写真だ。刻まれた階段状の工事用通路もじつに厳かに見える。工事が終われば水に落ちる。それも間もない。だからいま日差しを全身にためこんでいる…ような表情である。

2016年4月の熊本地震で、西原村では村内の半分以上にあたる家屋が全半壊した。農地農道、そして生産を支えるため池のダム施設も、である。

ダム（ため池）の復旧にあたっては調査で直下に活断層の存在が確認された。だから位置を移して新設することになり、その工事が進んでいる。写真はその景観だ。

ダムによって形成されるため池は、周囲の農地を潤してきた。西原村と、隣の益城町の田畑を灌漑する。桜の名所としても知られるようだ。

再びため池の水を支える日々の姿が目に見え、心に響く。

2号

揚水水車（台湾）
（PAWEES 2024 台中大会より）

下抄封支線水車は台湾南部にあり、農地に水を供給する施設だ。下流域の農業用水の需要増加に対応するため建設された。現在は金属製となっている。

台湾最大の灌漑用水路である嘉南大圳の支線に位置して、田畑への水供給を補助する役割を担った。水車のある嘉南平原は農業生産の中心地だった。多くの水車が役割を終えたが、ここは地域の文化財として保存されている。

水車は木材で作られた大きな車輪で、川の水流を利用して回転し、その力を利用して水を高い場所へ汲み上げる仕組みだ。水車の回転によって桶（バケット）が水を汲み上げ、水路に流すという設計になっている。シンプルな仕組みだが、当時の農業用水の供給効率を大きく向上させたようだ。

近年はこのような伝統的な水車は観光資源としても注目されていて、さらに地域文化や教育的価値を提供する場としても活用されているようだ。

3号

日本、台湾がつくった逆サイホン（台湾）
（PAWEES 2024 台中大会より）

写真の逆サイホン水路も、日本統治時代（1895～1945年）に建設された水利施設だ。水不足が常態化していた台中盆地への供給である。

大甲溪の水を盆地の農地へ供給するためには、山がちな地形や谷・川を越えなければならない難関があった。そこに当時は近代的な日本の土木技術や工学が導入された。＜逆サイホン＞が、山地を越えて水を運ぶための効率的な解決策として採用された。

この技術は琵琶湖から京都へ水を運ぶために明治時代に建設された琵琶湖疏水の一部でも使われている。疏水が山の下をくぐり抜けるための技術だ。

山に引かれた人為の痕跡であるこのようなパイプの景色はいつもきっと私たちの目をひきつける。地震で壊れて新設された水路も並行してあるのも物語的だ。並んだ姿が歴史、かつてといまの時間を繋いでいる。

4号

水争いと「赤坂泉」
（近田昌樹）

赤坂泉は、湧き水だけではなく、重信川川底に集水暗渠を作り、堤防下に樋管を通して伏流水を集める「流式泉」と呼ばれる特徴を持つ。

これによる灌漑用水の歴史は長い。

よくある例のように、ここも水争いに由来する。重信川の上流側の堰と下流側の堰を利用する集落間に水争いが生まれ、その解決策として堰の中間に赤坂泉を開削したという歴史だ。

ここには湧き水と川の水を効率的に利用する仕組みとして集水暗渠も使われている。集水暗渠で集めた水を、堤防の下を通る管を通じて泉に送るから、自然な湧き水に加え川の水も泉に供給される仕組みになる。

写真にうつる泉の姿はじつにさりげない。能ある鷹は爪をかくす風だ。

泉の周辺には、多数の桜が植えられ、お花見の場でもあるようだ。近年では周囲にベンチや広場も整備されて、行楽や散策などの休息スポット、地域の祭りやイベントの場としての役割も大きい。さまざまな生き物の生態観察の場としても利用されている。

5号

急斜面を下る大楠用水
（竹下伸一）

宮崎県最北の山間部に位置する日之影町の大楠用水は、山の水を農地へ供給する農業用水路だ。

江戸末期までこの地域には開田がなかった。それを可能にしたのが尾根の先端から急峻な山腹をくだる山腹用水路、大楠用水だ。土地のほとんどが渓谷の斜面にある高千穂郷・椎葉山地域では、河川から水を引くことが困難なため山中に水源を求めるしかなく、そのためにつくられたのが山腹を這う写真の水路だった。

切り立った断崖の台地に階段状に耕地が拓かれ、その耕地を中心に大小多数の集落が形成されてきた。その苦労が、江戸時代から続く農村歌舞伎の由来にもつながる。地元住民が自ら演じる農村歌舞伎という祭りはいまも続いている。

流線が意志の象徴のように見える。水筋の音が聞こえる。風の音も聞こえてきそうだ。聞こえる音が用水路の息づかいだ。

6号

天空の四国カルスト牧場
（近田昌樹）

四国カルスト地区における国営草地開発事業とは、四国カルスト地区に乳用・肉用牛の公共育成牧場を開設し、地域畜産振興を図ることが目的の事業計画。

牧場は愛媛県と高知県の県境に広がる四国カルストに位置し、独特の景観と豊かな自然環境で知られている。2億年以上前の古生代の石灰岩層が長年の風雨によって侵食されて形成されたという、珍しいカルスト地形だ。牧場としての利用は明治時代に遡り、当初は愛媛県側で始まった。

高原の草原地帯は、夏場には牛が放牧され、のどかな風景が広がるだろう。放牧されている牛たちは、高原の豊かな牧草を食べながら育てられるはずだ。

四国カルスト牧場の最大の特徴は、その雄大な風景と山頂付近に広がる開放的な草原地帯の美しさだ。見渡す牧場の風景にはどこにも違和感が見つからない。そうしたものを美しいと思えるのは、それが理にかなっているからこそもたらされる感覚ではないか。

7 月



平穏な日

(田巻恒河)

勝瓜頭首工は、栃木県真岡市に位置する農業用水施設。地域の農業生産を支えている。特に水田を中心とした農業のための灌漑用水を供給し、米作りをはじめとする農業活動を支えている。この頭首工は、鬼怒川から取水し、地域の農業用水を供給するために設置された。2011年には、農業用水の供給だけでなく魚類の遡上環境の保全にも配慮するよう改善されていまに至る。

用水路や頭首工の建設によって川が人工的に分断されると、本来遡上すべき魚が障害物に阻まれ、産卵地や餌場に到達できなくなる。そのため、魚道の設置は魚の自然な移動経路を補うために不可欠だ。

魚が遡上できるようになることで産卵場や餌場が確保され、川全体の生物多様性が保たれることになる。そしてまた魚の活動が増えることで、川底の泥や有機物が分解されやすくなり、水質の改善にもつながることがあるという。魚道の確保は他人事ではない。

夕暮れの静かな風景。この頭首工のもと、水の流れていくものの平穏を支えている、と思える想像をかき立ててくる写真だ。

10 号



地域を守る承水構

(北川 孝)

水茎干拓は、滋賀県近江八幡市で行われた干拓事業の一つ。湖沼地帯を干拓して新たな農地を開発することを目的とした。結果、いまは農地として定着し、地元の農業に重要な役割を果たしている。

海や湖を排水して土地を作る＜干拓＞は古代から行われているが、承水路構や排水路構のような水路システムの技術は中世ヨーロッパにはじまったようだ。歴史の初期段階では単純な水の流れに頼る方法が中心だったが、徐々に承水路と排水路のような体系的な水路システムが考案されるようになるわけだ。

それでも日本の干拓の歴史は多くの土地が海面下に位置するオランダのそれに較べて 300 年あまり後にはじまったといわれる。このオランダが分かりやすい例だが、土地の狭さにはじまる干拓の概念、技術の誕生と発達には世界でさまざまな興っている。

写真の、ごく自然と見える川筋の姿は、自然と見せられるほどに発達した干拓技術の所産だということではないか。

8 号



西播磨の疏水・宇原水路で
水辺の生きもの教室

(合田 弘)

姫路にも近い宍粟市は、豊かな緑、澄んだ空気、清らかな水をうたっている。揖保川の水を戸原頭首工から取水する営農が盛んだ。生産する酒米の白鶴錦、黒大豆の丹波黒はよく知られている。

営農を支えるのが用水の効率的な供給と設計された幹線水路と支線水路の組み合わせだ。幹線水路は主要な水の供給路であり、支線水路は幹線水路から分岐して各農地に水を届ける役割を果たしている。

そして今日の水路の役割は、いや営農の役割は地域の環境保全とも深く関わることになる。たとえば、魚道の設置により、魚類の遡上を助けるなど、生態系の維持にも配慮する視点が求められる。

写真は水路をたどって自然観察に遊ぶ子どもたちの姿だ。地元自治会と小学校のコラボレーション、「水辺の生きもの教室」が開かれている。子どもたちもみんな含んだ、私たちの生態系、その循環の合理が見てとれるような素敵な写真だ。

11 号



蔵王ダムクリーン作戦

(北川 孝)

滋賀県日野町にある蔵王ダムは、岩石や土砂を積み上げて建設されたロックフィルダム、農業用の利水ダムだ。そこには地下水涵養や空き容量を利用する洪水防止機能等の多面的機能もあるという。生活への密着度が高い。

だから、これらの多面的機能を楽しんでいる地域住民は、企業や行政とも協働して蔵王ダムや堤体周辺の除草作業やゴミ拾いなどの保全活動を行っている。写真はその様子だ。

巨体を横たえた動物の背にのほり、労って綺麗にしている図かと思えるような微笑まじさだ。人心地も豊かな写真だ。

蔵王ダムにつながる日野川地域は大きな水田地帯で、古くから近江米の産地として稲作が行われてきた。また伝統野菜、日野菜（ひのな）の持続にも熱心。ほのかな辛みと歯ざわりの良さ、えぐみ、香味の強さが特徴だという伝統野菜だ。

9 号



大地を支える吉高機場
(国営印旛沼二期農業水利事業吉高機場)
(谷 悠一郎)

印旛沼周辺は県下有数の米どころ。印旛沼周辺では、古くから稲作が始まっているが江戸時代からは食糧増産のためにさらに新田開発がすすんだという。しかし長い間洪水被害に悩まされ続けた。だから生産性の向上と洪水対策を目的として干拓事業が進められてきたところだ。そして多くの水田が作られ、印旛沼周辺は豊かな農業地帯になった。

写真の吉高機場は、千葉県北部の印旛沼周辺地域で行われている大規模な国営農業水利事業の一環として農業用水の安定供給を目的に老朽化した古い機場を統合した新たな機場として建設された。

そして印旛沼からポンプ場、用水路を通じて広大な水田地帯の隅々まで配水され、水田からの排水は排水路に集まり、ポンプ場から再び印旛沼に戻るといった地域内での循環灌漑が行われるようになった。印旛沼の水質をきれいに保つため、沼から取水した水できるだけ再利用して沼への排水を減らすものだ。

写真の景観はさながら地形と大気循環の模式図をジオラマ化した態と見えてくる。カメラの視点もやや人工的だ。鳥はいつもこんなふうには私たちの場所を見ているのだろうかとも。

12 号



ひっそりと佇む山の中のため池

(山田 昇)

奈良県の農地面積の3分の2を占める大和平野地域は、年間降水量が少なく大きな川や湖もない。だからずっと用水不足に悩まされてきた。それは稲作が盛んになる江戸時代には切実になった。ため池づくりが盛んになったのはこの頃からだった。

ため池は河川に恵まれない地域や降水量の少ない地域に求められた。瀬戸内地方には降水量が少ない。だからため池が多い。一番多いのは兵庫県。奈良も多い方だ。奈良盆地の中心部には大河川がないからである。

写真のため池の余水吐は、水路が強引な曲線状になっている。用水の切迫性がにじんでいる。事情と地形の臨場感が溢れている。

撮影者はここに勢よくしぶきを上げて流れるシーンを収めたかったようだ。だが数度の試みにも恵まれなかった。なにしろ現地は急傾斜部の上で、容易ではないらしい。そのメモを目にして余水吐のため池の顔を想像した。つくとときの難儀さも想像した。しかしだからこそ桐が池周辺は自然環境が豊かで、多様な動植物が生息しているのだと理解できる。ため池も生態系の一部を成してそこにあるのだ。